

歌舞伎俳優の芸談

——近現代歌舞伎におけることばの変化を知る資料として——

山下 洋子

1. はじめに

本稿は、明治時代になってから出版された芸談のうち、幕末生まれから大正生まれまでの歌舞伎俳優と新派の俳優（男性俳優のみ）がまとめたものを一覧する^{注1}。歌舞伎俳優による芸談は、江戸時代にも見られたが、多くは明治時代になってから出版された^{注2}。演劇評論家である藤田洋（元『演劇界』編集長）は、藤田（1971、p. 247）の中で、明治になり、歌舞伎が古典劇として定着し、その型を伝えるために芸談がまとめられるようになったと述べている。

芸談とは「芸道に関する話。主として芸の秘訣や苦心談をいう」（『大辞林第4版』・2016・三省堂）。藤田（1971、p. 246）によれば、「資料が乏しい関係上、芸談的要素が若干でも含まれているものまで入れて総称することが多いが、実際には、本人の自筆であるか、口述であるか、あるいは後年記述した覚え書であるかを問わず、芸をつかさどる者の舞台上の意見を書き留めたものに規定してよいのではなかろうか」とされる。本稿では、芸談の範囲を広げ、上記に示した意味における芸談以外に、俳優の生い立ちを中心に書いた「自伝」、日ごろ俳優自身が考えていることをまとめた「随筆」、俳優の子どもなどが父親のことを書いた「評伝」も含めて芸談とした。「評伝」の中には、演劇評論家がのちの時代に書いたものもあるが、それらは取り上げない。「日記」や「紀行文」を残す俳優もいるが、これらも一覧には入れない。ただし、そうした文献が残されていることは文中で紹介する。

本稿の筆者は、歌舞伎俳優が残した芸談（本稿で述べる範囲の芸談）を資料として、ことばの変化について検討したいと考えている。しかし、芸談を一覧としてまとめた資料はほとんどない（2021年7月時点）。藤田（1971、pp. 251-252）は、芸談のリストを個人的に作り、約70冊あると述べているが、未見のものがあること、また、自分でリスト化したもの以外にも重要な文献があるかもしれないという理由で、そのリストを示していない。柴田（2010）も、芸談を「通覧」したとしているが、一覧という形にはしていない^{注3}。

本稿は、本稿筆者の今後の研究の資料にするため、芸談の一覧をまとめようとしたものであり、芸談とは何かについて述べようとするものではない。また、「自伝」「随筆」「評伝」も、歌舞伎俳優（本稿においては新派俳優も含まれる）がまとめたものは、何かしら演技に関連する事柄が語られており、これらを芸談としてまとめることに大きな問題はない。藤田（1971）の述べるように、本稿の筆者が芸談をリスト化するにあたって、見逃している重要

な文献が残っているかもしれないが、これまでまとめた資料が存在しなかった分野であり、ひとまずの形であっても一覧を示すことが、筆者の研究に限らず、今後の歌舞伎研究にも資するものになると考える。

芸談の収集にあたって主に参照したのは、部分的にはあるがどのような芸談があるのかを紹介している藤田（1971、p. 251）、三浦（1975、p. 216）、石橋（1999）、「本の話」編集部（1999）、田辺（2005）である。古川緑波（1903-1961）が読んだ演劇関係の本のタイトルと内容とをまとめた『劇書ノート』（1953）も参考にした。そのほか、歌舞伎の芸談とは何かについて、いくつかの芸談を取り上げてまとめた戸板（1956）、加賀山（1956）も参照した。明治、大正、昭和初期にどのような歌舞伎俳優が活躍したのかを知るために、伊原（1933）、『演劇界』（1982）を参照した。

演劇雑誌には、歌舞伎俳優がその月に演じている役について述べるコーナーがあり、それを芸談として掲載していることがある。これらについては、今後必要に応じてリストに追加していくが、本稿では取り上げない。いずれも短い記事であるためで、3章「雑誌掲載の芸談」には1ページ以上の分量のある記事を示すことにした。

なお、本稿では俳優名および本のタイトル、引用文を適宜新字体に改めた。

2. 芸談一覧（出版物）

本稿における芸談一覧は、芸談としてまとめられた出版物、インタビューなどの雑誌記事、そして、俳優と演劇評論家による対談などをおさめた出版物、に分けて示す。また、出版物は、江戸時代生まれの俳優による芸談、明治時代生まれの俳優による芸談、大正時代生まれの俳優による芸談に分けて、それぞれ表にする。

歌舞伎俳優は襲名・改名をするため、どの俳優のことかをはっきりさせるのに代数が必要である。表では、代数を芸名のうしろに数字で記す。芸談には聞き書きによってまとめられたものが多いが、俳優本人により執筆されたものも一部ある。そこで、表に「形式」覧を設け、「聞き書き」のものは「聞」、本人執筆の場合は「執」、評伝は「評」とした。また、新派の俳優には名前のうしろに「新」をつけた。

2.1 江戸時代に生まれた俳優の芸談

江戸時代生まれの俳優のうち、明治時代にも活躍し、芸談が出版されている俳優と、その芸談を表1にまとめる。

表 1 芸談一覧（江戸時代生まれの俳優）

俳優	生没年	書名（出版年）	形式その他
中村仲蔵・3	1809-1886	手前味噌 三代目中村仲蔵自伝 （1944・北光書房）	執
市川団蔵・7	1836-1911	七世市川団蔵 （1942・石原求竜堂）	評（息子・団蔵・ 8による）
市川団十郎・9	1838-1903	団州百話（1903・金港堂）	評
		九世団十郎を語る （1950・推古書院）	評（娘婿・市川三 升・5による）
		九代目団十郎と私 （1966・六芸書房）	評（娘・市川翠扇 による）
市川左団次・初	1842-1904	父左団次を語る （1936・三笠書房）	評（息子・左団 次・2による）
尾上松助・4	1843-1928	舞台八十年 松助芸談 （1928・大森書房）	聞
尾上菊五郎・5	1844-1903	尾上菊五郎自伝 （1903・時事新報社）	聞
守田勘弥・12	1846-1897	第十二世守田勘弥 （1906・守田好作）	評
坂東家橘・初	1848-1893	故坂東家橘逸事（1893・成美堂）	評
片岡仁左衛門・11	1858-1934	万松軒昔話（1936）	聞（『名優芸談』（中 央公論社）収録）
		十一世仁左衛門 （1950・和敬書店）	評（息子・仁左衛 門・13による）
沢村源之助・4	1859-1936	青岳夜話（1937）	聞（『花影流水』（中 央演劇社）収録）
		花影流水（1937・中央演劇社）	評
市川中車・7	1860-1936	目黒談話（1936）	聞（『名優芸談』（中 央公論社）収録）
		中車芸話（1943・築地書店）	聞
中村鴈治郎・初	1860-1935	鴈治郎自伝（1935・大阪毎日新聞）	聞
		中村鴈治郎を偲ぶ （1935・松竹興行）	評
中村歌右衛門・5	1866-1940	歌右衛門自伝 （1935・秋豊園出版部）	聞
		魁玉一夕話（1936）	聞（『名優芸談』（中 央公論社）収録）
		歌舞伎の型（1950・文谷書房）	聞
実川八百吾郎・初	1866-？	実川八百吾郎芸談 舞台九十年 （1961・高知新聞社）	聞

表1のうち、『手前味噌』は3代目仲蔵の自叙伝である（小池（1972）、p.248）。もともと1885年から1888年の間、『歌舞伎新報』（歌舞伎専門雑誌）に掲載された。これに歌舞伎研究者の郡司正勝（1913-1998）が校注を加え単行本として出版されたものが表1の1944年発行のものである。3代目仲蔵が活躍した幕末、明治の歌舞伎界の様子、旅興行の様子がうかがえる。歌舞伎が近代化する以前の、歌舞伎俳優の位階などの用語が読み取れるほか、当時の歌舞伎俳優が使っていたであろう専門用語を知ることでもある。そのなかには、現代の歌舞伎界では使われなくなっていることばも多い（例：「初日」という意味の「大入り」など）。なお、現代語訳として『口訳手前味噌 三代目仲蔵自伝』（1972・角川選集）があり、資料として読みやすい。

7代目市川団蔵は、明治期の名優である。この7代目団蔵の評伝『七世市川団蔵』は、息子の8代目団蔵（1882-1966）が1942年に発表したものであり、8代目団蔵の生い立ちも語られている。7代目団蔵の得意とした役の型（演じ方）が記されているほか、幕末、明治の歌舞伎界の習慣などについても記している。なお、8代目団蔵は、吉右衛門劇団の老け役であった。1966年、『鬼一法眼三略巻』の鬼一、『助六』の髭の意休の二役を最後に84歳で歌舞伎俳優を引退し、そのまま四国遍路に出て、入水自殺した。こうしたいきさつは、作家・網野菊が『一期一会』（1967）に、戸板康二が『団蔵入水』（1980）にまとめている。

近代歌舞伎を確立したと言われ、「劇聖」として名高い9代目団十郎には、自伝や芸談はほとんど残されていない。7代目松本幸四郎など弟子たちが、その芸談の中に師匠のことばを残していたり、逸話を伝えたりするだけである。数少ない芸談として『団州百話』がある。この芸談は松居松翁（劇作家、1870-1933）が、9代目の生前に、近くで見たり聞いたりしたことを、その死後にまとめたものである。「団州曰く」というような書き出しであり、団十郎がどのような口調だったのかを知ることにはできない。一方、9代目団十郎と並び称せられる名優である5代目菊五郎の芸談は『尾上菊五郎自伝』が残されている。この芸談は、本人の口調がわかるような内容になっている。こうした芸談の内容の違いが、活歴と呼ばれる史実に忠実にした歌舞伎を作り出し、歌舞伎俳優の地位向上に苦心した9代目団十郎と、世話物を得意とし、江戸時代以来の歌舞伎俳優らしい逸話を残す5代目菊五郎の芸風の違いを表している。

なお、9代目に関連するものは、昭和になってから娘や娘婿によって書かれた評伝がある。9代目以降、その名跡をつぐ俳優が現れなかったが、娘婿の市川三升（さんしょう）（1882-1956）が10代目をつぐ意欲を示していた。三升と、その妻であり9代目の娘である市川翠扇（1888-1944）が9代目の評伝を出したのはそうした経緯があったのだろう。結局、三升は死後、10代目団十郎を迫贈されている。死後すぐに俳優の業績を残すために出版された評伝も多い。例えば、坂東家橘について書いた『故坂東家橘逸事』は、坂東家橘の死の直後に、生前の業績と、逸話をまとめたものである。12代目守田勘弥の『第十二代守田勘弥』も死後すぐに、大槻文彦（辞書『言海』の編者。1847-1928）の兄、大槻如電（1845-1931）によって書かれた評伝である^{注4}。

立者（主役級の俳優）のことを書いた芸談が多い中で、『舞台八十年 松助芸談』は、脇役の4代目尾上松助の芸談を小説家の邦枝完二（1892-1956）が聞き書きしたものである。江戸生まれの脇役俳優の様子がよくわかる内容になっている。また、東京や大阪の中心的な劇場で活躍した俳優によってまとめられる芸談がほとんどの中で、『実川八百吾郎芸談』は、高知の劇界で活躍した地方の俳優の芸談をまとめたものとして珍しい。

宣伝のために作られた冊子であることから表1に示さなかったが、珍しい資料として5代目中村歌右衛門の『芝翫』（1909・丸見屋商店出版部）がある。舞台用のおしろい会社が自社の開発した新しいおしろいの宣伝のためにまとめたものである。同様の宣伝冊子に『名優化粧談』（1910）もある（4章参照）。明治時代までの舞台化粧用のおしろいは、化粧ののりをよくするために鉛入りのものを使っていた。俳優の中には化粧の鉛により鉛中毒を起こし、手足のしびれや、胃腸炎などを起こすものもいた。5代目歌右衛門も、晩年に鉛中毒のために舞台上の動きに支障をきたしていたことが知られている。『芝翫』は、そうした事情を5代目歌右衛門に聞き、まとめたものである。この冊子の内容によって、5代目歌右衛門だけでなく、9代目団十郎にも若い頃に鉛中毒の症状があったこと、また、多くの明治時代の歌舞伎俳優が鉛中毒に悩まされていた様子が伝わる。こうした内容は現代にはあまり知られていないことである。

なお、江戸時代生まれの俳優たちが活躍した明治時代の歌舞伎界の様子は、岡本綺堂（1872-1939）による『明治の演劇』（1942・大東出版社）や『綺堂劇談』（1956・青蛙房）にくわしい。『明治の演劇』は、1965年に青蛙房から『明治劇談 ランプの下にて』としても出版されている。それ以前の劇界については、坪内逍遙（1859-1935）が『少年時に観た歌舞伎の追憶』（1920・日本演芸合資会社出版部）にまとめている。

2.2 明治時代に生まれた俳優の芸談

江戸時代に生まれた俳優の芸談は、その俳優の芸をなつかしみ、その業績をたたえるためにまとめられたいわば、「死絵（しにえ）」のようなものが多かった^{注5}。一方、明治生まれの俳優による芸談は、死後に発表されるものよりも、生前にまとめられるものが多い。

表2 芸談一覧（明治時代生まれの俳優）

俳優	生没年	書名（出版年）	形式その他
尾上梅幸・6	1870-1934	梅の下風（1930・法木書店）	聞
		扇舎閑談（1936）	聞（『名優芸談』（中央公論社）収録）
		女形の事（1944・主婦之友社）	聞
		尾上梅幸芸談（1946）	聞（『羽左衛門評話』（富山房）収録）

松本幸四郎・7	1870-1949	松のみと里（琴松芸談） （1937・法木書店）	執
		一世一代（1948・右文社）	執
喜多村緑郎・初 （新）	1871-1961	芸道礼讃（1943・二見書房）	執
		わが芸談（1952・和敬書店）	執
伊井蓉峰（新）	1871-1932	日本の演劇の説（1924・聚芳閣）	執
尾上大五郎・初	1874-？	楽屋ばしご 自伝随筆芝居道五十七年（1938・牧野五郎三郎）	執
市村羽左衛門・15	1874-1945	可江夜話（1936）	聞（『名優芸談』（中央公論社）収録）
		羽左衛門対談（1946）	聞（『羽左衛門評話』（富山房）収録）
中村梅玉・3	1875-1948	梅玉芸談（1949・誠光社）	聞
実川延若・2	1877-1951	延若芸話（1946・誠光社）	聞
河合武雄（新）	1877-1942	女形（1937・双雅房）	執
市川左団次・2	1880-1940	左団次芸談（1936・南光社）	執
		市川左団次覚書（1940・建設社）	評
坂東三津五郎・7	1882-1961	舞踊芸話（1937・建設社）	聞
		三津五郎芸談（1949・和敬書店）	聞
		三津五郎舞踊芸話 （1950・和敬書店）	聞
		父三津五郎（1963・演劇出版社）	評（息子・三津五郎・8による）
尾上菊五郎・6	1885-1949	音羽屋百話（1936）	聞（『名優芸談』（中央公論社）収録）
		芸（1947・改造社）	聞
		おどり（1948・時代社）	聞
中村吉右衛門・初	1886-1954	秀山弓譚（1936）	聞（『名優芸談』（中央公論社）収録）
		吉右衛門自伝（1951・啓明社）	聞
沢村宗之助・初	1886-1924	宗之助の面影（1925・伊藤都喜）	評
市川寿海・3	1886-1971	寿の字海老（1960・展望社）	聞
市川猿翁・初	1888-1963	猿翁芸談聞書（1963・時事通信社）	聞
花柳章太郎 ^{注6} （新）	1894-1965	技道遍路（1943・二見書房）	執
		雪下駄 芸談集（1947・開明社）	執
		女難花火（1955・雲井書店）	執
		役者馬鹿（1964・三月書房）	執
中村時蔵・3	1895-1959	三世中村時蔵（1961・演劇出版社）	評
中村秀十郎	1897-1960	秀十郎夜話（1958・文芸春秋新社）	評
市川左団次・3	1898-1969	市川左団次芸談きき書 （1969・松竹）	聞

中村芝鶴・2	1900-1981	中村芝鶴随筆集 (1953・日本出版協同)	執
		大文字草 (1961・東京書房)	執
		役者の世界 (1966・木耳社)	執
		続役者の世界 (1972・木耳社)	執
		歌舞伎随筆 (1977・評論社)	執
中村翫右衛門・3	1901-1982	人生の半分 中村翫右衛門自伝 (1959・筑摩書房)	執
		芸話 おもちゃ箱 (1970・朝日新聞社)	執
		演技自伝 (1973・未来社)	執
河原崎長十郎・4	1902-1981	勸進帳 (1965・角川書店)	執
市川小太夫・2	1902-1976	吉原史話 (1964・東京書房)	執
		吉原史話 続 (1968・邦楽と舞踊社)	執
中村鴈治郎・2	1902-1983	鴈治郎の歳月 (1972・文化出版局)	評
		役者馬鹿 (1974・日本経済新聞社)	聞
片岡仁左衛門・13	1903-1994	役者七十年 (1976・朝日新聞社)	執
		嵯峨談語 (1976・三月書房)	執
		とうざいとうざい 歌舞伎芸談西 東 (1984・自由書館)	執
		松島屋芝居ばなし 歌舞伎の型 13代目片岡仁左衛門にきく (1985・国立劇場)	聞
		芝居譚 (1992・河出書房新社)	聞
坂東三津五郎・8	1906-1975	聞きかじり見かじり読みかじり (1965・三月書房)	執
		戯場戯語 (1968・中央公論社)	執
		芸のころ 心の対話 (1969・日本ソノ書房)	聞 (安藤鶴夫との 対談)
		言わでもの事 (1970・文化出版局)	執
		芸十夜 (1972・駸々堂出版)	聞 (武智鉄二との 対談)
		歌舞伎 虚と実 (1973・玉川大学出版部)	執
		歌舞伎 花と実 (1976・玉川大学出版部)	執
嵐芳三郎・5	1907-1977	五代目芳三郎芸話 (1981・新日本出版社)	聞
中村勘三郎・17	1909-1988	自伝やっぱり役者 (1976・文芸春秋)	聞
		中村勘三郎楽屋ばなし (1985・文芸春秋)	聞

河原崎国太郎・5	1909-1990	河原なでしこ(自伝・女形の世界) (1955・理論社)	執
		女形芸談 (1972・未来社)	執
		女形百役 (1975・矢来書店)	聞
上村吉弥・5	1909-1992	一方の花 五代目上村吉弥の生涯 (1993・遠嶋貞子)	評
市川団十郎・11	1909-1965	市川海老蔵 (1953・歌舞伎堂第一書店)	聞

表2には、現代までも名著として伝わる芸談が含まれている。6代目尾上梅幸による『女形の事』『梅の下風』である。この2つの芸談は『女形の芸談』として演劇出版社から1998年に再版されるなど、これまでに何回か復刻されている。このように資料性の高い芸談があらわれることが、明治生まれの歌舞伎俳優における芸談の特徴である。

また、2代目中村芝鶴や、8代目坂東三津五郎、新派の女形、花柳章太郎がことばについての指摘や芝居の習慣の変化などを多くの著作に書き残しており、いずれも資料性が高い。

そのほか、5代目上村吉弥の聞き書きの芸談も貴重である。大分県杵築の地域歌舞伎の子役から、主に、小劇場に出演する俳優になり、のちに大歌舞伎の俳優にもなった。単に脇役の芸談ということではなく、地域歌舞伎、小劇場の歌舞伎、そして大歌舞伎まで経験した俳優によるものであり、それぞれの歌舞伎の様子や風俗、歴史を知ることができる内容になっている。

明治生まれの俳優の芸談の特徴として、もう一つ取り上げられるのは、大部屋俳優による芸談が現れるということである。特に、歌舞伎界が変化した時期とも言える戦後に、明治生まれの大部屋俳優にインタビューした芸談が増えてくる^{注7}。前章で述べた江戸時代生まれの俳優による芸談でも脇役のものは見られたが、名題の俳優あるいは地方で歌舞伎を演じていた俳優によるものだった。しかし、明治生まれの俳優の芸談には、名題下の俳優（大部屋俳優）によるものが現れるのが新しい。

戸板康二（1915-1993）は、「口伝」を収集しておく必要があり、その理由は、明治時代の「団十郎・菊五郎に膾炙した古老や俳優がまだ生きているから」（戸板（1954）、p. 7）であると述べている。こうした意識から、人気俳優だけでなく、団十郎、菊五郎の芸を支えた大部屋俳優の芸談が多く残されるようになった。例えば、『楽屋ばしご』は、6代目尾上菊五郎の番頭（マネージャー）として、裏方で歌舞伎を支えた牧野五郎三郎（尾上大五郎）がまとめたものであり、歌舞伎の演技だけでなく、裏方の様子を残した。牧野五郎三郎（尾上大五郎）は、演劇雑誌『演劇界』にも、1950年代にそのインタビュー記事が掲載されている（表4参照）。また、『秀十郎夜話』は、黒衣に徹した大部屋俳優の生涯を、演劇評論家の千谷道雄（1920-2006）がまとめたものである。そのほか、千谷道雄には、『裏方物語 舞台裏の人々』（1964・早川書房）もある。大部屋俳優や、歌舞伎を支える裏方の人達にインタビューをし、歌舞伎の裏方の仕事の様子を現代に伝えている（表5参照）。

芸談以外の資料であり、一覧には示さなかったものを以下にまとめる。まず、日記および紀行文がある。日記は、『吉右衛門日記』（1956・演劇出版社）、『喜多村緑郎日記』（1962・演劇出版社）がある。また、3代目尾上多賀之丞（1889-1978）による日記が2006年に『人間国宝 尾上多賀之丞の日記-ビタと呼ばれて』（青草書房）として発行されている。そのほか、初代中村鴈治郎のもとで脇役として活躍した2代目市川箱登羅（1867-1944）による日記もある。これは本としては出版されていないが、雑誌『舞台展望』（舞台展望社）において1951年に、『歌舞伎 研究と批評』（歌舞伎学会）において1989年から現在までシリーズで掲載されている。

歌舞伎俳優の洋行の様子をまとめた紀行文が3冊発行されている。2代目市川左団次がソビエトで行った歌舞伎興行の様子をまとめた『市川左団次歌舞伎紀行』（1929・平凡社）と、ソビエト公演後に、イタリアで公演した様子まとめた『市川左団次伊太利紀行』（1929・松竹）、また、15代目市村羽左衛門の洋行の様子を聞き書きした『欧米歌舞伎紀行』（1929・平凡社）である。『市川左団次歌舞伎紀行』はソビエト公演に参加した俳優のことばと、ソビエトでの新聞の劇評が掲載されている。2代目市川松蔦（1886-1940）のことばが掲載されているのが貴重である。『伊太利紀行』は、左団次による紀行文のほか、イタリアでの劇評などを読むことができる。半分は日本語で、もう半分はイタリア語で書かれている。『欧米歌舞伎紀行』は、本人のことばをほとんど拾えないが当時の洋行の様子がわかる。こうした歌舞伎俳優の紀行文は、いずれも1929年に出版されている。

そのほか、実際に接した俳優についてそのエピソードとともに記した随筆として、『勘三郎の天気』（1988）、『海老蔵そして団十郎』（2004）がある。いずれもエッセイストが書いた俳優伝である。本人のことばそのものよりもエピソードが語られているもののため、一覧には入れなかった。前者は山川静夫（1933-）による17代目中村勘三郎について書いたものである。後者は、関容子（1935-）による11代目市川団十郎から、12代目団十郎（1946-2013）、11代目海老蔵（1977-）についてまとめたものである。また、俳優の関係者が出版した本として『吉原夜話』（1964・青蛙房）がある。初代市川猿翁、8代目市川中車（1896-1971）、市川小太夫の母親であり、2代目市川段四郎（1855-1922、初代市川猿之助）の妻である吉原妓楼の女主人・喜熨斗古登子が、幕末から明治にかけての吉原の様子について口述したものである。当時の劇界の様子にも触れており、巻末には市川中車、市川小太夫が母について語る随筆が掲載されている。

そのほか、明治時代に活躍した俳優の様子がわかるものとして『芸界通信 無線電話』（1975復刻・青蛙房・初版は『演芸逸史無線電話』（1918））がある。歌舞伎座や市村座などの歌舞伎劇場を経営した田村成義（1851-1920）によって雑誌『歌舞伎』などに発表されたものである。すでに亡くなった明治時代の名優や芝居関係者が、冥界から電話で連絡をしてくるという趣向でまとめられている。俳優たちの特徴をとらえた描き方になっており、俳優の口調や明治の劇界の様子がよくわかるおもしろい資料である。

2.3 大正時代に生まれた俳優の芸談

芸談は江戸生まれ、明治生まれの俳優のことが多く、大正生まれの俳優による芸談は多くない。

表3 芸談一覧（大正時代生まれの俳優）

俳優	生没年	書名（出版年）	形式その他
尾上松緑・2	1913-1989	踊りの心（1971・毎日新聞社）	聞
		役者の子は役者 （1976・日本経済新聞社）	聞
		松緑芸話（1989・講談社）	聞
中村又五郎・2	1914-2009	芝居万華鏡 めぐる舞台のうらおもて（1982・中央公論社）	聞（山田五十鈴との対談）
		聞き書き 中村又五郎歌舞伎ばなし（1995・講談社）	聞
		芝居 日本の伝統を伝えることわざ ことばの民俗学4（1990・創拓社）	聞
尾上梅幸・7	1915-1995	梅と菊（1979・日本経済新聞社）	聞
		拍手は幕が下りてから（1989・N T T出版）	聞
市村羽左衛門・17	1916-2001	十七代市村羽左衛門聞書（歌舞伎の小道具と演技）（1983・NHK出版）	聞
中村歌右衛門・6	1917-2001	歌右衛門の疎開（1980・文芸春秋）	聞・評
		歌右衛門の六十年（1986・岩波書店）	聞・評
河原崎権十郎・3	1918-1998	紫扇まくあいばなし（1987・演劇出版社）	聞
中村小山三・2	1920-2015	小山三ひとり語り（2013・演劇出版社）	聞
中村雀右衛門・4	1920-2012	女形無限（1998・白水社）	聞
		私事 死んだつもりで生きている（2005・岩波書店）	聞

表1、表2、表3を合わせて見るとわかるとおり、1930年代から1950年ごろまでに、江戸時代生まれ、明治生まれの俳優による芸談が多く出版されている。戦争によって世の中が変化する中で、歌舞伎の伝統を残そうとする意識が働いたためである。また、歌舞伎俳優が世代交代し、江戸生まれや明治生まれの俳優たちのことを聞いて残しておかなければならな

いという意識もあったのだろう。このことは前節で示した戸板（1954、p. 7）のほか、下記に引用する加賀山（1956、pp. 161-162）によってもわかる。加賀山直三（演劇評論家、1909-1978）は、6代目菊五郎や初代吉右衛門による芸談と、1950年代に活躍していた歌舞伎俳優の芸談との違いについて、次のように述べている。

菊五郎、吉右衛門までは、芸談は、彼らが呼吸している場の日常茶飯と同じ立場のものであつた。歌舞伎が古典でなかつたからである。彼らは、芸談によつてその職業の知識を加え、その生活全体の哲学だとか人生論だとか、モラルだとかを認識した。「芸談」は「芸人道」の護符であつた。

ところが、今日の俳優たちにとつて、「芸談」は彼らの全生活からは部分的に離れたものであり、職業の知識、職業の体験談であるに過ぎない。前代から譲られた芸談は、古典に入るための基準であり、自分の語る芸談は、古典を演じる自己を確認することである。

芸談の性質が変化したことも、芸談が多く出版された理由としてあげられる。藤田（1971、p. 253）は、江戸時代以来の芸談にあった秘伝的性格が消え、昭和期に入って、俳優が自分の芸について積極的に語り始めたとして述べている。

時代はさかのぼるが、それまで芸談は秘伝であるという意識があったことがわかることばが中村（1953、p. 40）に残されている。引用にある「小父さん」とは6代目尾上梅幸のことである。

秘伝にわたることはなかなか簡単に教えるなどと承知して貰えないものだつたからだ。しかし小父さんの気持は私たちの予想する他の大先輩の気持のようなものとはちがつていた。

「お家芸だとか秘伝だとかいつて門外不出にするのは料簡の狭い話で、いくらか秘伝を話したところがそう簡単にできるものでないから差支えない。誰でも聞いただけでできるくらいなら、ほんとうの秘伝芸術にはならない。」

こうしたことで芸談が再評価され、1978年には芸談全集として『日本の芸談』（九芸出版）がまとめられている。この全集には明治生まれの俳優が残した芸談が中心に掲載された^{注8}。1966年に歌舞伎や文楽を上演する専門劇場として国立劇場が開館した。国立劇場は芝居を上演するだけでなく、資料収集も行っており、例えば、13代目仁左衛門の芸談を『国立劇場歌舞伎の型』『対談集 歌舞伎の型』にまとめ、出版している。

一方で、前に述べたとおり大正生まれの俳優の芸談は多くない。昭和を代表する俳優である6代目中村歌右衛門は、戦後の芸談集や、平成以降の芸談集に、そのことばが残されているほかは、エッセイストの山川静夫氏との対談による芸談が残るだけである。

その芸が映像として残る時代になったことと、本にまとめなくとも、雑誌などのインタビューや座談会によって、俳優たちのことばを手軽に残せるようになったことなどが影響していると考えられる。2代目中村又五郎・佐貫（1990、p. 8）にはビデオテープによって歌舞伎が録画されるようになり、そうした映像が、稽古に参照できるようになったと述べて

いる。つまり、芸談の役割のひとつである、先人の芸を残すことが、映像にとってかわられたということである。

昭和三十年代のはじめに録音テープがお目見得し、先輩たちのセリフ回しを手軽く録音、参照することが出来て、世の中にこんな便利なものが出来たなんてと喜んだものです。

(中略) ビデオは舞台を画面に再現してくれるのですから、これは大助かりです。登場人物の居所、出入り、動き、道具の置き場所など録音テープの時代には及びもつかなかったことを確かめることも出来ますし、役者にとっては嬉しい贈り物といえます。

大正生まれの俳優の芸談は、歌舞伎の入門書の役割を担うものが出てくるのが特徴的である。それ以前は、歌舞伎ファンがひいきの俳優について知るためのものでもあった芸談が、歌舞伎を知らない人に歌舞伎の魅力を伝える役割を担うようになっている。例えば、中村又五郎による芸談は、いずれも入門書として語られたものである。

出版物の一部に掲載されている記事のため、この一覧に示していないものとして、6代目歌右衛門と2代目鴈治郎のインタビューが『活字にならなかった話 速記五十年』(1980・筑摩書房)に掲載されている。速記をもとにしており、俳優のことが生き生きと残されている。また、今回の対象範囲外ではあるが、作家・池波正太郎(1923-1990)が好きな俳優として中村又五郎を取り上げ、自身で評伝を書いている。『又五郎の春秋』(1977・中央公論社)である。専門的なことばを使わず、又五郎のまじめな芸風を伝える、読みやすい随筆である。

3. 雑誌掲載の芸談

雑誌掲載の芸談を表4にまとめる。雑誌には、座談会などの形で俳優の話を聞く記事も多くあるが、本稿では、「芸談」「自伝」と名付けられているもののうちで1ページ以上の記事を取り上げた。現在は歌舞伎専門雑誌として『演劇界』(1943～)があるだけだが、明治時代以降に多くの演劇専門誌が発行されている。藤田(1971, p. 247)によれば、三木竹二、伊原青々園によって刊行された『歌舞伎』(1900-1915)は、歌舞伎の型を記録するために芸談が多く収集されたという。そのほか、明治時代に発行された演劇専門雑誌には『演芸画報』(1907-1943)がある。戦後には、『幕間』(1946-1961)が発行された。

こうした演劇専門雑誌に掲載された芸談は多くあるうえに、『中央公論』などの雑誌にも芸談が掲載されることがあった。雑誌掲載の芸談は表4に示すものがすべてではない。

表4 芸談一覧(雑誌掲載)

時代	俳優	生没年	記事名(年)	出典
江	市川団蔵・7	1836-1911	市川団蔵自伝(続)	歌舞伎 (1910年2月号)

江	片岡仁左衛門・11	1858-1934	片岡仁左衛門芸談 一父を語る一	話 (1933年10月号)
江	市川中車・7	1860-1936	中車芸談	早稲田文学 (1952年7月)
江	市川門之助・6	1862-1914	市川門之助自伝	歌舞伎 (1910年7月号)
明	尾上大五郎 (牧野五郎三郎)	1874-?	中島座時代を語る	演劇界 (1946年8月号)
			牧野老人秋夜話上中下	演劇界(1951年10月号～12月号)
明	坂東三津五郎・7	1882-1961	三津五郎芸談	読書春秋 (1951年2月)
明	尾上菊五郎・6	1885-1949	巨匠芸談	中央公論 (1949年7月号)
明	尾上音三郎	1885-?	大部屋言 尾上音三郎に訊く	演劇界 (1962年7月号)
明	中村吉右衛門・初	1886-1954	芸談	世界春秋 (1950年1月号)
明	市川寿海・3	1886-1971	寿海自伝	演劇界(1957年1月号～12月号)
明	尾上多賀之丞・3	1889-1978	尾上多賀之丞聞書上中下	演劇界(1975年9月号～11月号)
明	市川猿翁・初	1888-1963	芸談	中央公論(1956年8月特大号)
			猿之助芸談	日本文化財 (1956年3月号)
			猿之助自伝	テアトロ(1962年6月号～10月号)
明	中村時蔵・3	1895-1959	時蔵自伝	演劇界(1958年6月号、9月号)
明	利根川金十郎・初	1897-1985	明治人間シリーズ3	演劇界 (1975年3月号)
明	市川左団次・3	1898-1969	三世左団次自伝	演劇界 (1962年2月号～1963年4月号)
			市川左団次芸談	月刊文化財 (1966年6月号)
明	尾上新七・5	1898-1980	明治人間シリーズ5	演劇界 (1975年5月号)
明	坂東秀調・4	1901-1985	四代目坂東秀調聞書	演劇界 (1978年10月号)
明	尾上多賀蔵・3	1901-1991	明治人間シリーズ6	演劇界 (1975年7月号)

明	市川寿美蔵・7	1902-1985	明治人間シリーズ4	演劇界 (1975年4月号)
明	中村鴈治郎・2	1902-1983	中村鴈治郎芸談	月刊文化財 (1974年3月号)
明	片岡仁左衛門・13	1903-1994	片岡仁左衛門芸談	月刊文化財 (1975年9月号)
明	市川福之助・3	1904-1990	明治人間シリーズ7	演劇界 (1975年8月号)
明	中村駒七	1905-1982	大部屋言 中村駒七に訊く	演劇界 (1962年8月号)
明	市川八百蔵・9	1906-1987	明治人間シリーズ1	演劇界 (1975年1月号)
明	中村松若・初	1906-1979	明治人間シリーズ10	演劇界 (1976年1月号)
明	沢村源之助・5	1907-1982	明治人間シリーズ2	演劇界 (1975年2月号)
明	中村梅花・3	1907-1992	明治人間シリーズ9	演劇界 (1975年12月号)
明	坂東弥五郎・2	1909-1999	明治人間シリーズ8	演劇界 (1975年9月号)
明	坂東八重之助	1909-1987	大部屋言 坂東八重之助に訊く	演劇界 (1962年12月号)
明	坂東調四郎	1910-1997	大部屋言 坂東調四郎に訊く	演劇界 (1962年5月号)
明?	中村成助	不明	大部屋言 中村成助に訊く	演劇界 (1962年11月号)
大	尾上梅祐・2	1913-1988	大部屋言 尾上梅祐に訊く	演劇界 (1962年10月号)
大	沢村可川	1913-1997	(聞き書き) 沢村可川	歌舞伎 研究と批評 (11) 1993
大?	中村福緑	不明	大部屋言 中村福緑に訊く	演劇界 (1962年6月号)

さて、表4の雑誌掲載の芸談一覧を見ると、『演劇界』には、1950年代から明治生まれの歌舞伎俳優の生い立ちや、劇界の変化、あるいは芸について語った内容が掲載されている。歌舞伎の型など演技に関連する事柄に限らず、明治期以降の歌舞伎界の様子を史料として残しておこうという考えによってまとめられたものである。ベテラン脇役俳優（名題、名題下を含む）にスポットをあて、「大部屋言」は、歌舞伎研究家・松井敏明（松井俊論）が、「明治人間シリーズ」は演劇評論家の津田類が俳優の話を聞き、まとめている。前章でも述べたが、歌舞伎の演技は放送の映像、あるいは劇場による記録映像として残されるようになった。その一方で、放送などには映らない楽屋内の様子などは聞き取りでしか残らないということを考えてのことである。

このほか、大部屋俳優の生活について語り合う座談会が『演劇界』1957年11月号に掲載されている。「協同研究・大部屋の俳優生活」というタイトルで、尾上音平 (?-1960)、3代目坂東薪蔵 (1898-1973)、坂東八重之助 (1909-1987) と演劇評論家の郡司正勝、利倉幸一との座談会である。坂東八重之助は、菊五郎劇団のタテ師として知られ、歌舞伎研究家の郡司正勝とともに『歌舞伎のタテ』(1984・講談社) も残している。

歌舞伎俳優ではないが、歌舞伎を支える小道具方や大道具方の座談会も『演劇界』(1955年2月号) に掲載されている。

4. そのほか

ここまで、俳優の生まれた時代別に出版されている芸談にはどのようなものがあるかをまとめた。最後に、芸談の一覧には示しにくい芸談集、対談集、談話集をまとめる (表5)。

表5 芸談一覧(対談など)

作品名	作者	内容
談叢第1編 (1901-1902・鳴臯書院)	鹿島桜港 (淑男)	片岡市蔵・3(1851-1906)、市川小団次・5 (1850-1922)、沢村源之助・4、沢村宗十郎・7 (1875-1949)、沢村宗之助・初の芸談が掲載されている。
演芸名家の面影 (1910・宇宙堂)	川尻清潭	芸談集。歌舞伎俳優は、尾上梅幸・6、片岡仁左衛門・11、中村鴈治郎・初、市川団蔵・7、沢村宗十郎・7、市川八百蔵・7 (中車・7)、市川高麗蔵・8 (幸四郎・7)、市川猿之助・初 (段四郎・2)、市川左団次・2、尾上菊五郎・6、中村吉右衛門・初、中村芝翫・5 (歌右衛門・5)。新派は、伊井蓉峰、河合武雄、川上音二郎 (1864-1911)、村田正雄 (1871-1925)、喜多村祿郎など。
自ら語る現代名優身の上話 (1928・博文堂)	久佐太郎	歌舞伎俳優のほか、新派や新劇の俳優による芸談。歌舞伎俳優は、尾上梅幸・6、市川左団次・2、守田勘弥・13 (1885-1932)、市川猿之助・2 (猿翁・初)、沢村宗之助・初、市川松蔭・2 について掲載されている。
芸談百話 (1940・博文館)	黒崎貞治郎	歌舞伎俳優は、中村吉右衛門・初、尾上菊五郎・6、市川左団次・2、中村歌右衛門・5、市村羽左衛門・15、片岡仁左衛門・12 (1882-1946)、片岡仁左衛門・13 の芸談が掲載されている。

俳優対談記 (1942・東宝書店)	三宅周太郎	歌舞伎俳優は、羽左衛門・15、河原崎長十郎・4、河原崎国太郎・5、中村芝翫・6(歌右衛門・6)、尾上菊之助・3(梅幸・7)、猿之助・2(猿翁・初)、中村吉右衛門・初、尾上菊五郎・6との対談。そのほか新派の俳優との対談も収録している。松竹社長の大谷竹次郎との対談も収録されている。
芸能対談(1950・創元社)	三宅周太郎	松本幸四郎・7、嵐雛助・10(1913-1986)、坂東三津五郎・7、尾上松緑・2、実川延若・2、阪東寿三郎・3(1886-1954)、市川海老蔵・9(団十郎・11)、大谷友右衛門・7(雀右衛門・4)、片岡我当・4(仁左衛門・13)、中村時蔵・3、尾上菊五郎・6との対談と、新派俳優や文楽太夫や三味線弾きとの対談も収録している。
芸談(1951・東和社)	東京新聞社文化部 編	東京新聞に掲載された芸談を集めたもの。戸板康二、北条秀司、柳栄二郎、高橋義孝などの演劇評論家と俳優などとの対談形式で、芸談をまとめたもの。歌舞伎俳優は、中村吉右衛門・初、市川猿翁・初などのほか、中村吉之丞(1886-1958)、市川照蔵(1886-1955)など脇役の俳優の芸談を収録している。
名優と若手(1953・創元社)	三宅周太郎	三宅周太郎による戦前の名優についての評論とともに、戦前からの名優あるいは、戦後のスター(若手)との対談集。歌舞伎俳優との対談は、中村吉右衛門・初、中村歌右衛門・6、中村鴈治郎・2、市村羽左衛門・16(1904-1952)、松本幸四郎・8(初代白鸚、1910-1982)、中村勘三郎・17。
芸に生きる芸談集(1956・実業之日本社)	東京新聞社文化部 編	東京新聞に掲載されていた芸談を集めたもの。邦楽演奏者、舞踊家、歌舞伎俳優の芸談集。歌舞伎俳優では、市川左団次・3、中村時蔵・3、市川寿海・3の芸談が掲載されている。
歌舞伎の星(1958・布井書房)	三宅周太郎	三宅周太郎による劇評とともに、団十郎・11、中車・8、歌右衛門・6との対談が掲載されている。
八人の歌舞伎役者(1959・青蛙房)	加賀山直三	戦後の劇界を担う若手である、尾上松緑・2、中村鴈治郎・2、尾上梅幸・7、市川団十郎・11、片岡仁左衛門・13、中村勘三郎・17、松本幸四郎・8(白鸚・初)、中村歌右衛門・6が収録されている。

裏方物語（舞台裏の人々） （1964・早川書房）	千谷道雄	劇場の裏方として働く人へのインタビュー集である。馬の足を演じる脇役俳優、市川左喜松や中村杵蔵。そのほか松本高蔵など、歌舞伎の歴史では残らないような大部屋俳優の談話を読むことができる。
伝統と現代 第十一巻 現代の芸談(1970・学芸書林)	波木井皓三	江戸、明治にまとめられた芸談の内容について、当代の歌舞伎俳優と対談するもの。中村歌右衛門・6、中村翫右衛門・3、尾上多賀之丞・3が対談し、中村芝鶴・2の随筆も掲載されている。
現代の歌舞伎芸談（1990・演劇出版社）	藤野義雄	中村歌右衛門・6、中村鴈治郎・2、松本白鸚・初（幸四郎・8）、中村勘三郎・17、片岡仁左衛門・13、尾上梅幸・7、尾上松緑・2、実川延若・3、河原崎国太郎・5、中村雀右衛門・4、市川羽左衛門・17の芸談が収録されている。

演劇評論家の川尻清潭（1876-1954）によってまとめられた芸談集『演芸名家の面影』（1910）は、今回、調べた芸談の中では古い時期にまとめられた貴重な資料である。ここに掲載されている俳優のうち、初代市川猿之助は、2代目市川段四郎のことであり、この俳優のことばを残した芸談は、今回調べた中では、『演芸名家の面影』以外には見当たらない。『談叢』（1901-1902）には、3代目片岡市蔵や、5代目市川小団次など、なかなか芸談が残されていない俳優のことばがのっている。

『自ら語る現代名優身の上話』（1928）には、ほかに芸談が残されていない13代目守田勘弥のことばを見ることができる。

『芸談百話』（1940）には、12代目片岡仁左衛門の芸談が収録されているのが珍しい。片岡仁左衛門は、13代目仁左衛門の著作が多く、その13代目が父親の11代目片岡仁左衛門の芸談を残している。しかし、上方の歌舞伎界から、15代目羽左衛門の女房役として東京劇壇に迎えられ、戦後に非業の最期をとげた12代目の芸談はほとんど残されていない^{注9}。

演劇評論家の三宅周太郎（1892-1967）による『俳優対談記』（1942）、『芸能対談』（1951）、『名優と若手』（1953）は対談形式でまとめられており、俳優たちの口調が伝わる。これらの対談集の中で、『名優と若手』にある16代目市村羽左衛門の芸談は、ほかには残されていない。15代目羽左衛門の息子であり、この対談の中でも父、15代目のことを語っている。また、『俳優対談記』は、戸板（1942）において、俳優のことばがよく伝わるものとして貴重な記録であると述べられている（p. 289）。

『八人の歌舞伎役者』（1959）は、戦後の歌舞伎界を支える花形俳優である8人の芸談を掲載している。中では、11代目市川団十郎の芸談が珍しい。海老蔵時代に芸談を出しているが（表2参照）、それ以降はまとまった芸談はなく、雑誌にインタビューや座談会の記事があるだけである。

『現代の歌舞伎芸談』（1990）は、昭和生まれの花形俳優と、明治、大正生まれのベテラン俳優との芸談をまとめている。ほかに芸談、芸談集を残していない3代目実川延若（1921-1991）の芸談が掲載されている。

前章で述べた雑誌における芸談の掲載と同様で、歌舞伎の演技に限らず、歌舞伎文化を後世に残すためにまとめられたのが、『裏方物語 舞台裏の人々』（1964）である。劇場の裏方として働く人々の様子を伝えている。この時代にはまだ、明治、大正の歌舞伎界を知っている人が多く残っており、その談話の中から、古い時代の劇界の様子がうかがえる。俳優の談話は多くはないが、中村杵蔵という馬の足を演じていた大部屋俳優の生涯について語り、のちの時代には伝わりにくい劇界の暗部を描いている。

宣伝用の冊子であるため表には掲載しなかったが、『名優化粧談』（1910・丸見屋商店出版部）には、7代目沢村宗十郎の舞台化粧についての談話がのっている。この7代目宗十郎は、名和事師として知られるが、まとめた芸談はほとんど残されていない。戸板（1952）も「宗十郎には芸談がなかった。」（p. 139）と述べている。本稿の筆者が7代目宗十郎の芸談として確認できたのは、『談叢』『演芸名家の面影』と、この『名優化粧談』に掲載のものだけで、宗十郎のことばを知ることができる数少ない資料である。ただし、これも戸板（1952）が「竹二・青々園の「歌舞伎」にはときに、宗十郎の芸談がのつてゐるが、これは口述筆記でなく、勝手に編集者が拵へたものではないかと思ふ。」（p. 139）と述べており、実際に宗十郎のことばなのかはわからない。慎重に取り扱うべきだろう^{註10}。

そのほか、歌舞伎研究家や新聞の演劇記者が見聞きした、明治時代の名優の芸風や芸談をまとめたものも出版されている。新聞記者の平山蘆江（1882-1953）は、取材において聞いた歌舞伎の芸の工夫を『日本の芸談』（1942・法木書店）として発行している。「序」に、新聞記者として見聞きした芸談や芸の工夫を書き残さなければ、それらが消えてしまうという危機感からこの本をまとめたと記している。遠藤為春（1881-1969）が見た歌舞伎俳優について語った内容を戸板康二がまとめた「私の見た名優」は、1957年に『演劇界』において連載されている。芸談のあまり残っていない5代目市川新蔵（1861-1897）、市川権十郎（1848-1904）について語られており、明治時代の名優の演技を知るための貴重な資料である。なお、この内容は『歌舞伎座を彩った名優たち』（2010・雄山閣）として発行されている。『役者芸風記』（1935・三島霜川）、『芸壇三百人評』（1907・森暁紅）、『歌舞伎名優伝』（1956・河竹繁俊）など演劇評論家による俳優評をまとめたものもある。また、初代吉右衛門、6代目菊五郎が亡くなった直後には多くの評伝がまとめられている。戸板康二は、『演劇人の横顔』（1955）、『素顔の演劇人』（1956）において、自身が実際に会い、話を聞いたことがある歌舞伎俳優など演劇関係者についての逸話やそのことばをまとめている。

5. まとめ

本稿では、幕末、明治、大正生まれの歌舞伎俳優が残した芸談を近現代歌舞伎におけるこ

とばの変化を知る資料とすることを目的に一覧した。『演劇界』（1982）に名前が掲載されており、明治時代の名優として知られているものの、芸談が見当たらない人も多い。例えば、4代目中村芝翫（1831-1899）、3代目沢村田之助（1845-1878）、3代目中村歌六（1849-1919）、5代目市川新蔵、3代目中村雀右衛門（1875-1927）、中村魁車（1875-1945）、4代目中村富士郎（1908-1960）、など、名優として後世まで知られている俳優の芸談は見当たらない。こうした俳優の空白部分を埋められるように、歌舞伎専門雑誌掲載の芸談を中心に引き続き調査を進めたい。

注1 「新派」は、「新派劇」のことで「明治時代中期に、歌舞伎に対抗しておこった、現代世相を中心とする写実的な劇」（『新選国語辞典第9版』）である。現代は「劇団新派」がその流れをくんでいる。歌舞伎とは異なる演劇を目指したものだが、初期は、歌舞伎と同様で、女性役は女形が演じていた。幕末、明治、大正の演劇の様子を書き残している芸談を一覧するという本稿の目的から考えて、新派俳優の芸談も掲載することにした。

注2 江戸時代に書かれた芸談には次のようなものがある。『役者論語』は元禄時代にまとめられたとも言われ、坂田藤十郎（1647-1709）、芳沢あやめ（1673-1729）などによる芸談が収録されている。中でも、『あやめぐさ』は女形の心得を記した芸談として名高い。そのほか、『古今役者論語魁』は、2代目市川団十郎（1688-1758）、初代沢村宗十郎（1685-1756）などの芸談が掲載されている。また、2代目市川団十郎には『市川栢庭舎事録』『老のたのしみ』、初代中村仲蔵（1736-1790）には『月雪花寝物語』もある。このように江戸時代に書かれた芸談がないわけではないが、数は多くなく、藤田（1971）は、『役者論語』以降、「明治維新後の芸談再登場まで約一三〇年間の空白がある」（p.244）と述べている。

注3 柴田（2010）は、芸談から、歌舞伎の演技とはどういうものなのかを読み解こうとするものである。なお、次のような誤字があるため、ここに記しておく。p.67にある『十六代市川羽左衛門聞書』は『十七代市川羽左衛門聞書』の誤りである。また、同ページの注釈にある「三代名作」は「三大名作」の誤りである。

注4 俳優のことが収録されていないため、一覧には入れなかったが、劇作家・木村錦花（1877-1960）によってまとめられた評伝『守田勘弥』（1943）もある。

注5 「死絵」は、浮世絵の一種である。「人気役者または高名な文人・画家などが死んだとき、その似顔絵に、没年月日・法号・辞世などを記して追善のために版行したもの」（『大辞林第4版』）。

注6 花柳章太郎は、多くの随筆を残している。本稿では、芸談に近い内容のものを取り上げたが、表中にあるもの以外に、『水中花』（1932・はなやぎ会）、『紅皿かけ皿』（1936・双雅房）、『菜種河豚』（1940・演劇新派社）、『きもの』（1941・二見書房）、『きもの簪』（1949・和敬書房）、『かぐや餅』（1956・美和書院）、『舞台の衣装』（1965・求竜堂）、『わたしのたんす』（1978・三月書房）、『狐のかんざし』（2008・三月書房（復刻））がある。

注7 主役を演じる名題俳優（立者・江戸時代に名前が看板に出るような俳優のこと）ではなく、脇役や師匠の世話をする俳優たちのことを名題下あるいは「三階」「大部屋俳優」と言う。楽屋

が個室ではないことから、大部屋俳優と言ったり、その大部屋が楽屋の3階にあったことから「三階」と言ったりする。

注8 『日本の芸談』（九芸出版）は、歌舞伎の芸談のほか、能、狂言、文楽、舞踊、邦楽、新派、新国劇、新劇、映画、雑芸、寄席芸、それぞれの芸談が収録されている8巻の全集である。

注9 12代目仁左衛門は1946年3月に、自分の下で使っていた見習いの狂言作者の若者によって殺された。事件の事情は戸板（1946）にまとめられている。

注10 「竹二」とは、森鷗外の弟であり、劇評家として知られる三木竹二（1867-1908）のことである。「青々園」は、伊原青々園（1870-1941）のことで、『明治演劇史』（1933）、『団菊以降』（1937）など、明治以降の演劇の歴史をまとめた演劇評論家である。この2人は、1900年に歌舞伎雑誌『歌舞伎』を創刊した。

引用資料

石橋健一郎（1999）「芸談つまみ喰い」『本の話』平成11年3月号 pp. 16-21

伊原青々園（敏郎）（1933）『明治演劇史』早稲田大学出版部

演劇界（1982）『明治 大正 昭和 三代の名優』11月号臨時増刊 40-13

加賀山直三（1956）「今日の芸談」『歌舞伎全書第3巻（俳優篇）』東京創元社 pp. 160-209

小池章太郎（1972）「解説」『口訳手前味噌 三代目仲蔵自伝』角川選書 pp. 246-252

柴田庄一（2010）「芸芸の修練と熟達の機制（メカニズム）-歌舞伎の芸談を通覧して」『名古屋大学大学院国際言語文化研究科 編 31（2）』 pp. 61-82

田辺明雄（2005）『日本芸談録』沖積舎

戸板康二（1942）「「俳優対談記」の意義」『俳優論』冬至書林 pp. 285-290

戸板康二（1946）「仁左衛門事件」『演劇界』1946年5月号 4-4 pp. 68-69

戸板康二（1952）「舞台の色事師-宗十郎追懐-」『劇場の椅子』創元社 pp. 133-141

戸板康二（1954）「口伝の整理」『演劇評論』1954年5月号 pp. 6-8

戸板康二（1956）「芸談と伝統」『歌舞伎全書第3巻（俳優篇）』東京創元社 pp. 96-158

中村芝鶴（1953）「幽霊伝授」『中村芝鶴随筆集』日本出版協同株式会社 pp. 34-54

中村又五郎・佐貫百合人（1990）『日本の伝統を伝えることわざ 芝居』「ことばの民俗学4」創拓社

藤田洋（1971）「芸談の世界」『日本の古典芸能第8巻 歌舞伎』 pp. 239-258

古川緑波（1953）『劇書ノート』学風書院

「本の話」編集部（1999）「芸談ブックガイド」『本の話』平成11年3月号 pp. 28-29

三浦広子（1975）「歌舞伎研究鑑賞文献案内」『国文学 解釈と教材の研究』

20（8）（280） pp. 214-218

（やましたようこ 大学院後期課程在学学生）